

# 一人旅・三人旅

太田和彦文  
text by Kazuhiko Ota



illustration by Miyako Nomura

しばしば旅に出る。「禁煙、窓側、一枚」がチケットを買う時のお約束だ。

旅の移動中は一人に限る。仕事で数名で行く時も離れて座り、自分の時間をもつ。中年女性四人のグループが席を向かい合わせに直し、「さあ、おしゃべりしましょう」と出発から到着までしゃべり放しなのを見ると、女はよくしゃべるなあと思う。聞こえてくるのは旅先の楽しみではなく、嫁しゅうと、世間話ばかりで、どこにいてもできる話だ。

一人の時間をもつて何をするか。読書か、仕事の下調べか、睡眠か。私は何もしないでぼうつとする。新幹線からの見慣れた風景、家並み、看板。今日は富士がよく見える。小田原か、最近うまい蒲鉾食べてないな。浜名湖か、鰻で一杯もいいな。

人間たまには、ぼうつとすることが必要ではないか。職場ではぼうつとなどしてられない

い。職場は職場だ。休息の場であるはずの家でも、三〇分なにもしないでぼうつとしていると「どうかしたの」といぶかしがられる。公園で一人そうしていると警官がやってくる。サウナもいいが裸にならなければならぬ。ぼうつとするのもなかなか難しいことだ。旅の移動中はそれができる。

私の旅は居酒屋に入るのが目的だ。一人で旅に出て居酒屋で一杯やる。訪ねるのはその土地にながく続く古い居酒屋だ。夕方五時の開店よりはやく地元の人やつてきて飲みはじめている。職場や自宅の近所で明るいうちから一杯はなかなかできないが、自分を誰も知らない旅先ならばできる。肴は土地のもの。地物はうまくて安く、皆さんの注文を真似ていけばまず間違いはない。

ひととおり頼み、そこでもぼうつとする。手元には酒と肴があるから手持ちぶさたになることはない。「鮎を二〇匹釣った」「市長の娘が嫁に行く」聞こえてくる地元の話が耳をなごま

せる。

豊橋の居酒屋「千代娘」は関西出張時に途中下車して何度か訪ね、なじみになった。京都で修業した主人の腕は確かで、カウンターに並ぶ大皿のバイ貝煮、筍、筑前煮、ごまあえ、常節煮などから、私がいつも注文するのは辛子で食べるタコ煮だ。時期ならば伊良湖岬の鯛、この辺りで「玉イカ」と言うミッキーマウスのような耳の「耳イカ」があればラッキーだ。そして地酒「千代娘」をツイー。つやつやした黒髪を巻き上げた白割烹着のおかみさんの福々しい笑顔、後ろでにこにこするとんぼメガネの娘さんがうれしい。あとでお酌してもらおう。

一人旅が好きだが男の三人旅もときどきやる。酒を飲むのは三人がいい。二人は常に話相手、最後は疲れるが、三人は交替で話が回り気が楽だ。四人になるとタクシー一台に乗れず、居酒屋も四人一緒に座れないこともある。したがって三人だ。行きも帰りもそれぞれ勝手。ホテル

だけは同じところに決め、夕方五時口ビー集合で初めて顔を合わせ、いざ出陣。もちろん居酒屋だ。最初に一人二万円くらいずつ集め共通財布に入れてだれかがそれをもち、タクシーも飲み代もすべて払う。余れば分け、足りなければまた集める。この井勘定がいちばん楽だ。

四〇代、六〇代(私)、七〇代の男三人で静岡に集まった。共通財布担当の四〇代は紺上着の出張姿、私はポロシャツ、現役引退した七〇代はアロハシャツに雪駄だ。静岡の居酒屋「多可能」は創業大正二二年。黒潮のカツオをはじめ時期のサクラエビ、シラスは本場。今日は天竜川の鮎が人気だ。男三人それぞれ適当に頼み、まずはビールで乾杯。それから静岡の夜の町を数軒はしこして、午前様となったホテルロビー。

「えーと、残高精算。ひとり一五〇〇円バック」  
そこで解散。翌日みなどうしたかは知らない。

【おた かずひこ】

1946年、北京生まれ。グラフィックデザイナー、エッセイスト、元東北芸術工科大学教授。『居酒屋百名山』『自選ニッポン居酒屋放浪記』『太田和彦の居酒屋味酒覧』(以上、新潮社)、『愉楽の銀座酒場』(文藝春秋)、『ひとり旅ひとり酒』(京阪神エルマガジン社)、『東京大人の居酒屋』(毎日新聞社)など著書多数。DVD『太田和彦のニッポン居酒屋紀行』全5巻(ジェネオン)も。